

電柱・中二階・ぐらぐらの一等賞

佐藤信

晶文社

電柱

中二階 いつもの

あつちこつち

ぐらぐらの一等賞

將軍もどきの法螺息で あなた訓示す

ああ 翩翻たり さすがの旗印

子之刻ちやうどの「晴天ナリ」

大揺れの白タイル

富士山かなり欲情 わくわくの腹ゆすり

冗談ぬめり もつれ あなた出血す

ああ 朗朗たり とても通信

子之刻ちやうどの「波高シ」

鼠小僧は誰れでしょう？

次郎吉さんは誰れでしょう？



著者について

佐藤信（さとう・まこと）

一九四三年東京に生まれる。

現在―演劇センター68／71所屬。

作品集『あたしのビートルズ』（晶文社）

嗚呼嵐小僧次郎吉

一九七一年一月二五日印刷

一九七一年一〇月三〇日発行

著者佐藤信

発行者中村勝哉

発行者株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五五局四五〇一（代）・四五〇三（編集）

振替東京六二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©1971 Makoto Satoh

へ検印廃止／落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価九八〇円

嗚呼鼠小僧

佐藤信



晶文社

浮世混浴鼠小僧次郎吉

5

陰画絵本鼠小僧次郎吉

73

恋々加留多鼠小僧次郎吉

147

嗚呼鼠小僧次郎吉

227

富士山見えたか

311

「次郎吉のテーマ」

339

後記

342

記録

344

浮世風呂鼠小僧次郎吉

う
き
よ
ぶ
ろ
ね
ず
み
こ
ぞ
う
じ
ろ
き
ち



人物たち

へへ

そそ

ぼぼ

鼠一番

鼠二番

鼠三番

鼠四番

鼠五番

門番

「朝ぼらけの王」とあがめたてまつられる物体

劇場のようなものである必要は全然ない。すこし広めのありあわせの部屋。入口のところに「しと断ち」を張りわたすだけで、あとは一切その部屋のままのかたち、ということにする。すなわち——本舞台三問の間、いつもの通りのとりとめもなし。照明は、できるだけ蠟燭のあかりを主としたい。

序曲

太平の 太平の あっけらかんに
白い血しぶきとばしましょう

大日本が闇から闇を

ほつつき歩いて

いつの間に

ここはお国を三里半

はなれもいたさず つきもせで

八千代の松と 若竹に

昇る朝日のまっくろけ

天の経廻り 鼠の嫁入り

輪廻転生 一天地六

転がる賽の

河原もの

鼠百匹 黒おてんてん

人間界と天上界

その中程が

ちゅう二階

夢と現のしらばけが

迷いのはてのひと踊り

諸行無みょうの闇を踏み
足吹く風のほらほらほらと
しどろもどろに
あら 舞い狂う

第一章

暗闇の中で、柱時計の鐘——おぼつかない氣に、切れ切れに、十二打つ。

女の氣配。重く、にぶい足どり。おびたらしい血を身体から流しながら、女がゆっくりと歩む。その右手に、嬰兒用の真新しい産着が白くひらめいた、と見えた次の瞬間、産着は宙に舞い、大きな弧を描く。

産着には、墨痕あざやかに、「子の刻参上」。

女の姿は、無い。

とたんに、あたりに響きわたる高笑い——「わっはっはっは」。

鼠小僧次郎吉（鼠の五番）が浮かぶ。お決まりの着付け、半身に構えて——

五番 早速自分より発します。おひかえなすっておくんさい。（ぐるっとまわりを見廻して）早速おひかえ下すってありがとうございます。かよう履きつけましてのあいさつは失礼にございますが、お許しをこうります。向かう上さんとは、今日こうはじめて御意得ます。したがいまして、自分生国は関東です。しがたない盗人稼業が渡世にござんす。名前の儀は鼠小僧次郎吉と発します。お見かけどおりの若年ものでござんす。行末万端お

引立てを願います。

音楽——「次郎吉のテーマ」。

同じ着付けの、一番から五番までの風が浮かびあがる。

〽いのちの洗濯 柘榴口

くぐるお前は 素っ裸

背のもんもん 牡丹いろ

うらみの一突き 湯気の中

ああ うちたいな うちたいな

天にかわりて

不義うちたいなあ

〽一丁かまして うれしやな

返り血あびて たのしやな

花のお江戸の 下水道

あぶくのなかで 股濡らす

ああ うちたいな うちたいな

天にかわりて

不義うちたいなあ

〽うめぼし飴を噛みしめて

甘い齒ごたえ　しゃくの種

ギリギリ人情　穴めぐり

しゃぶったあの娘の　舌ざわり

ああ　うちたいな　うちたいな

天にかわりて

不義うちたいなあ

〽あおく光るぞ　おう　いええ！

あおく光るぞ　おう　いええ！

長いサイレン——五匹の鼠は散りぢりに消える。

いささかの青空。

門番、おごそかな足どりで出る。

きんきらきんの禪姿。針のついていない柱時計を背負う。ほどよいところに立ちどまって——

門番

気持のよい目覚めでした。まったくいつもの朝なのです。睡眠は充分で、おなかも丁度よく減っています。ぼくは平和な門番。恵まれた、気楽な稼業なのであります。ご不浄へ行き、顔を洗い、ラジオ体操をし、それからお念仏を百べん。身も心も、本当に本当にすがすがしい。この丘の上から見渡せば、まちの家々からはつつましい朝の煙がたちのぼり、田圃は青々、小川はきらきら——なに不足ないみち足りた風景じゃありませんか。お早ようさん。お早ようさん。（深呼吸をひとつする。それから口調をあらためて）ああ、本日も晴天なり。本日も晴天なり。

へへ、出る。「夜鷹」ふう。

へへ お早よう——といえはいいのかねえ？

門番 どういうこと？

へへ いえさ、つまり「お早よう」と、こんな朝でもやっぱりいうべきなのかしらん、て——

門番 だって「お早よう」——ほかになんかある？——（氣づいて）あ、グッドモーニング！

へへ 違うよ。言葉の問題にあらずして、そもそも、そんなふうに軽やかに挨拶すること自体——こんな朝にさ。ねえ、ちょっと変みたいな氣もするだろ？

門番 まったくいつもの朝なのです。

へへ て、たしかにあんた、先刻そういったよ。

門番 じゃないってこと？

へへ そう思う？

門番 だから、そうじゃないんですかって——

へへ あんた自身の問題として、だよ。どう、あんたにとって、今朝は「まったくいつもの朝」なりや？

門番 あたし、敢えて繰り返しませんけどねえ。あたし自身のただ今の心境についてなら、先程「氣持のよい目覚めでした」より「本日も晴天なり」にいたる、一連の口上で申しあげた通り、その通りに間違いない。それでなきゃ、なんでわざわざ——（へへに、あらためて）おや、こいつは、姐さん。はい、お早ようさん。どうです、昨夜はよくお稼ぎかい？

へへ そんなもんかねえ。

門番 そんなもん、です。

へへ（つくづく）氣の毒だねえ——じゃ、ひとつきかしてもらうけどさ、あんた、昨日の朝、ここへ出て来てなんていった？ 昨日じゃなくてもいいや、一昨日、一昨々日——いやさ、一年前、十年前の今月今朝、あん

たここてなんておいいだよう？

門番 はて、そりや——

へへ あんたは、いつも同じようにいうよ。「気持ちのよい目覚めでした」。朝ばかりじゃない、あたしが毎日まいんち、街のあかりがとまるころ、この長屋——

門番 (訂正する) マンション。

へへ (素直に従う) あたしが毎日まいんち、街のあかりがとまるころ、このマンションからなりわいに出かけるとき、あんたはいう。「今晚は、姐さんしっかりお稼ぎよ」。雨の日も、風の日も、あたしは出かける。そりや、あたしはいいよ、どうせ身体をずぶず濡らす商売だもの。でもさ、あんたまでもが、雨にも負けず風にも負けず——

門番 「今晚は。姐さんしっかりお稼ぎよ」

へへ あたしの一日の始まりはさ、いつもいつも同じ。だけど、ここが肝腎なところだけど、ここを出て一たん、「さよなら橋」のたもとにあたしが立てばさ——いいかい、あたしの毎日は千変万化、日常のなかの非日常というか、(口ぶり変って) この世に男と名のつく突撃棒が何本あるかは知らねえが、その棒の数だけあたしは違った世界を見ることが出来るわさ(と、見得)。

おりしも、ギターなどを抱えたそそが現われる。まごうかたなき「妾」ふう。大口あいて、うたう。

へおつむてんてん 天道の

天の経めぐり てんめぐり

輪廻転生 朝ぼらけ

無明の 無明のはての

しらじら

主さんへ

影ふみますぞよ

あと一歩

あと一歩

〽おかまちよ いちよい ゆであずき

鐘は九ツ かんちきち

諸行無常の まっぴるま

紅蓮の 紅蓮のときの

あからさま

主さんへ

影ふみますぞよ

あと一歩

あと一歩

〽さしちがえ

ぬらりと過ぎた

花畑

あかいよる

ふきあがる

しろい血潮

門番（愛想よく）お早ようさん——姐さん、いつ聞いても、よい声だねえ。

そそ あらあ、門番さん。今朝みたいなときも、あなたはやっぱり「お早よう」なのお？

へへ（門番に）ほらね。

門番（あきらかに苛々してくる）「お早よう」が、何故悪い！

そそ だって、そりゃあなた——（へへに）ねえ。

へへ（うなずいて）結局こういうことだよ。あんたはねえ、客観的状况よりは、おのれの内的心境に生き、おのれの内的心境よりは、自ら発するところの情性的にして通俗的なことばのなかに生きてる。

門番（正直に）ぼく、解んない。

へへ 毎朝あたしが稼ぎから戻るころ、あんたは寢床から這いずりだして、「気持ちのいい目覚めでした」から「本日も晴天なり」までの、楽天的なモノロオグを、十年一日の如く無批判にぶちかます。あたしがその煙草屋の角を曲ったあたりで、かならず聞こえてくらあね。つまりね、「いい、いい」ってわめいているうちに、その気になったようなつもりになって、「お前さん、いつも素敵だわね」と結論する、それと同じことさ。あんたにとって毎朝は、ただ習慣的に「晴天なり」なんだよ。それで決まって、「お早ようさん」。

門番 それじゃまるで、ぼく間抜けみたい。

そそ（笑いながら）いいえちっとも——

門番 本当？

そそ 無害な存在は間抜けではあり得ないことよ。それは莫迦というのよ。

門番 ひどい。

へへ あんた本当に「丘の上から」見渡したことあるのかい。「田圃は青々、小川はきらきら」をその充血したまんまるい目玉でたしかめたことあるのかい？

門番（あらためてそういわれてみると、急に自信がなくなる）それは、そのう——